

東北歯科大学歯学会での発表

岡 伸 二

私が東北歯科大学歯学会（現奥羽大学歯学会）で発表させて頂いたのは大学6年の春のことだった。今も手元に原稿が残っているが、演題13番「腎被膜下自家骨膜移植による異所性骨形成に関する実験的研究」というその当時初の学生による学内学会発表だった。何故学生が発表することになったかの経緯を話すと、私が4年生在学中に東京歯科大学病理学教室から赴任して来られた渡辺治先生の講義、実習に感動し、すぐに先生に傾倒していくようになったのがきっかけであった。暇さえあれば病理学教室に遊びに行き、また食事や酒をご馳走してもらいながら聞く研究の話に益々引き込まれ、必須ではないが卒業論文を書きなさいということになった。

実験のテーマを5年生の5月に頂き、出来たばかりの動物舎に保健所から譲り受けた雑種の犬を数頭飼い、動物実験が6月から始まった。ラボナールで麻酔をし、その犬の橈骨骨膜を1部剥離し腹直筋膜下に移植、異所性に骨組織を新生させるというものであったが、4回にわたる実験のいずれも意図した結果を得ることが出来なかった。しかしながら標本のホルマリン固定、脱水、パラフィン包埋、ミクロトームにて切片標本を作りH・E染色といった一連の流れを覚えることが出来た。

また、腹直筋膜下移植実験に並行してラットを用い、アルコール固定した横紋筋を腹直筋膜下に移植し、軟骨組織を新生させる実験と、同じラットの歯を抜き、抜歯窩に他家の脱灰歯牙を移植し硬組織を新生させる実験を行ない、こちらは満足な結果を得ることが出来た。

初めの犬の実験失敗を受けて、9月に今度は犬の腎臓の被膜下に橈骨骨膜を1部剥離し移植、異所性に骨組織を新生させるという再実験を行なった。1週間ずらして右腎、左腎と移植手術を加えるため、腹直筋膜下移植と違い、深手を負った犬は衰弱し点滴を施したりした。実験終了まで犬が（最後は屠殺するのだが）持つか心配で、授業が終わると動物舎の掃除と犬に餌を与える日々が続いた。

再実験は成功したものの、今度は学会発表の準備という試練が待ち受けていた。現在のようにパソコンにデジタルカメラ、そしてパワーポインターといった三種の神器があればいとも簡単に発表が出来る時代ではなく、スライドはブルーフィルム（いわゆる青転）であり、臓器に硬組織が新生されていることを確認するためのソフテックスフィルムの現像や、切片標本を拡大しカラーズライドにしたりすることなど学生の私にとって

至難の業であった。

翌年の4月、発表準備のため渡辺治先生とともに東京歯科大学の病理学教室に行くと、私の中学、高校の同級生であり親友の井上孝がその春大学を卒業し、病理学教室助手として働いていた。彼も病理学の素晴らしさに魅せられたのだろう。彼はのちに東京歯科大学病理学教室助教授となり、現在臨床検査学の教授となって基礎、臨床問わず研究や講演会で活躍している。

資料も整い、予演会を繰り返し学会当日となった。会場は病院棟5階の講義室で、会場には日頃臨床実習や講義でお世話になっている教授、助教授、講師そして今春助手になりたての先輩たちが勢ぞろいしており、いやがうえにも緊張させられ、私はただひたすら原稿を読み続けるだけで、スライドを見る余裕も無かった。その上、質問には答えられず、渡辺先生の助け船を借りることとなった。

今、振り返ってみると、この発表が教室や自分の業績になる訳でもなく、卒業成績に考慮されることもなかったのだが、実験をし、資料をまとめ、発表するという経験は大学卒業後、慶応大学医学部附属病院歯科口腔外科教室に入局してからも学会発表等で生かされたと実感している。そして、学生の拙い発表を暖かく見守り受け入れてくれた学内学会（奥羽大学歯学会）に、30年近くの時は過ぎているものの、改めて感謝する次第である。

奥羽大学歯学会雑誌の巻頭言には甚だ不釣合いなものとなってしまったが、私の学内学会の思い出と、今の率直な気持ちを書かせて頂いた。

(奥羽大学歯学部同窓会会長)